

坂元古墳群 1号墳出土の金属器

井上 志峰（伊都国歴史博物館）

I. はじめに

坂元古墳群は糸島市富に所在し、古墳時代後期から終末期にかけての3基の古墳からなる。昭和54（1979）年に前原町教育委員会（当時）による遺跡の現地踏査の際に、土取り工事等で崩壊寸前のところを実見され、急遽発掘調査が行われた。

今回、当古墳群の資料整理を行った際、報告書に未掲載であった1号墳出土の金属器資料を確認することができたため、資料の周知を図るとともに今後の検討資料となるよう本稿で紹介する。

II. 位置と環境

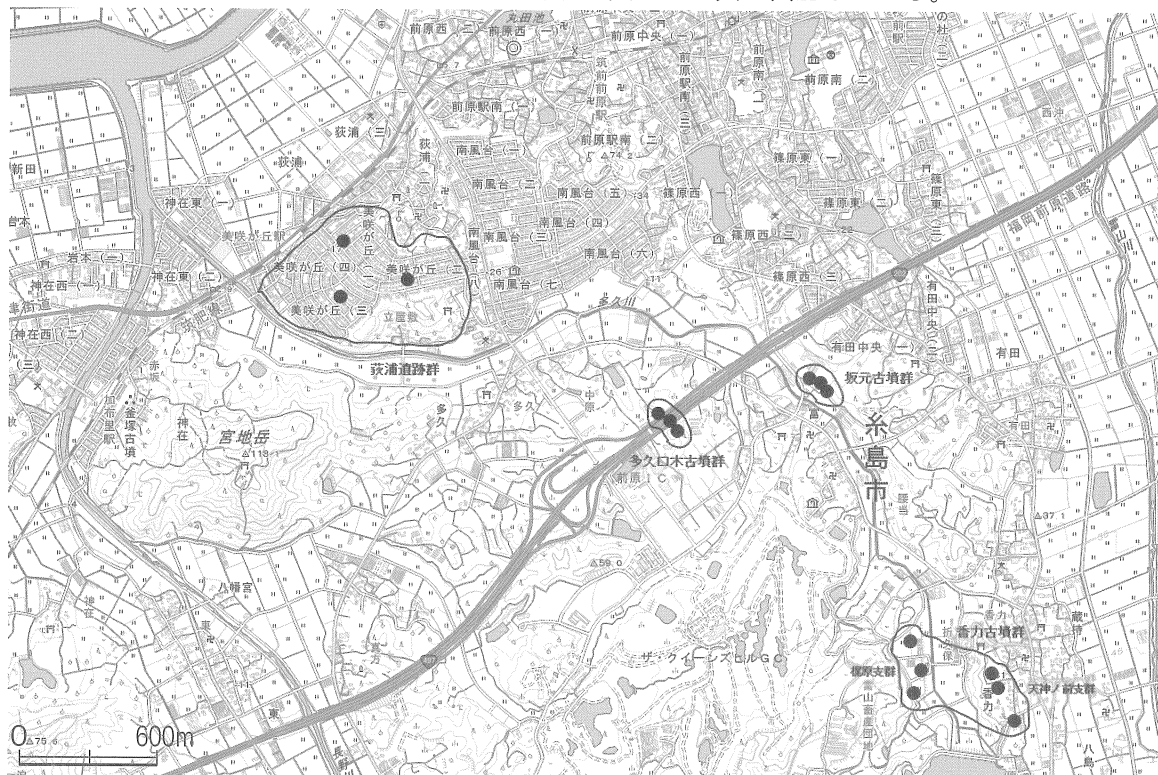
坂元古墳群は糸島市の南西部、雷山川と長野川に挟まれた低丘陵地帯の谷間を流れる多久川の中流東岸、標高37m前後の丘陵上に位置する。

多久川両岸の丘陵上には、多くの古墳が点在する。河口に近い荻浦遺跡群では、古墳時代前期から終末期の前方後円墳2基を含む20基ほどの古墳

が確認されている。砂魚塚1号墳（前方後円墳）からは金銅装大型雲珠金具、立石1号墳（前方後円墳）からは方格T字鏡、坂の下5号墳（方墳）からは圭頭大刀や銀装辻金具が出土している。

坂元古墳群の対岸の丘陵上には、古墳時代中期末から後期前半の多久口木古墳群がある。円墳の1・2号墳、前方後円墳の3号墳からなり、1号墳の横穴式石室（複室構造）からは鉄製武器や馬具、2号墳からは金銅装棘葉形杏葉、3号墳からは装身具類や鉄製武器が出土している。

多久川上流の香力地区の丘陵上には、古墳時代後期から終末期の香力古墳群がある。川の東西岸に各3基の分布が確認され、西岸の梶原支群（3基とも円墳か方墳）、東岸の天神ノ前支群（前方後円墳2基、円墳1基）がある。特に香力梶原1号墳は、多久口木1号墳と同じく複室構造の横穴式石室をもち、心葉形鏡板・杏葉、金銅装雲珠金具・辻金具が出土している。



多久川流域の主な古墳（群）

（電子地形図25000（国土地理院）を加工して作成）

Ⅲ. 坂元古墳群 1 号墳について

坂元古墳群 1 号墳は、6 世紀前半に築造された墳丘径16.3m、高さ2.1mを測る円墳である。周囲に幅1.7m、深さ0.35mの周溝がめぐる。

埋葬施設は、多久口木 1 号墳や香力梶原 1 号墳と同じ複室構造の横穴式石室である。全長10.6mを測るが盗掘を受け破壊が著しく、ほぼ腰石のみが現存する。玄室は長さ3.8m、幅2.6m、前室は長さ2.2m、幅1.4m、羨道部長さ3.5mで、羨門部は石塊で閉鎖されていた。なお、羨道部土層断面の精査及び土器型式等から、6 世紀後半に追葬が行われたと考えられている。

遺物は、玄室又は前室の左側壁部で須恵器（坏蓋、杯身、高坏、ハソウ等）・馬具（引手）が、墓道部左側より須恵器（坏、高坏、甕等）が出土している。紹介する金属器は玄室や前室、羨道からの出土とみられるが、正確な位置は不明である。

Ⅳ. 1 号墳出土の金属器について

石室や羨道から出土したとみられる金属器は、武器、馬具、装身具等がある。

(1) 武器 (写真 1・2)

① 刀装具 (写真 1)

写真 1 は金銅装鞘金具で、責金具及び筒金具とみられる。鞘口、鞘間、鞘尻のいずれのものかは不明だが、長径の大きさから鞘尻につく金具ではないかと推察される。筒金具は、外表面に文様等の装飾は認められず、黒ずみや緑青が部分的に見られるが、鍍金部分は残りがよい。内部に鞘材の木質は確認できなかった。現存長4.8cm、長径2.8cm、短径1.2cm、厚さ0.1cmを測る。責金具は長径3.0cm、短径1.8cm、厚さ0.2cmである。

② 鉄鏃 (写真 2)

鉄鏃片が 8 点出土しており、そのうち鏃身部 1 点、頸部とみられるものが 6 点、茎部とみられるものが 1 点である。

1 は三角形鏃の鏃身部で、現存長5.2cm、幅3.1cmを測る。2～5 及び 7・8 は長頸鏃の頸部とみられる。2 は現存長6.4cm、幅0.8cm、3 は現存長3.8cm、幅0.8cm、4 は現存長3.0cm、幅1.0cm、5 は現存長3.2cm、幅0.6cm、7 は現存長4.6cm、幅0.6cm、8 は現存長6.7cm、幅0.8cm。6 は茎部とみられるが、どの形式による鏃のものかは不明である。現存長3.6cm、幅0.6cm。



写真 1 金銅装鞘金具

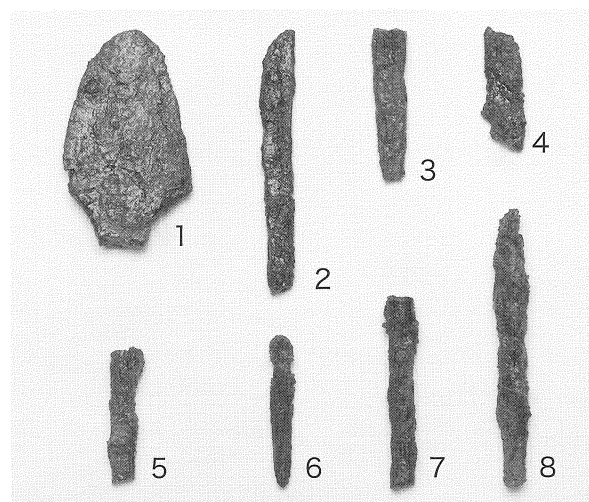


写真 2 鉄鏃

(2) 馬具 (写真 3～7)

① 轡 (写真 3・4)

写真 3・4 ともに鉄製素環鏡板付轡である。いずれも一対のものとみられる。

写真 3 の 1 は、鏡板は楕円形を呈し、板状の長方形の立間（一部欠損）が付いている。また、引手や銜の環状部が残る。素環部長径7.2cm、短径6.2cm、立間幅3.0cm、同高2.0cmを測る。引手の残存長は8.5cm、銜の残存長は4.8cmを測る。2 は、1 と同じく鏡板は楕円形を呈するとみられるが、半分ほど欠損している。1 とのセット関係を踏まえると、素環鏡板は同程度の大きさとなるだろう。また、立間は 1 と同じく板状の長方形を呈しており、長方形の孔が穿たれている。立間幅3.0cm、同高2.0cmを測る。

写真4の1は、鏡板は楕円形を呈し、板状の長方形の立間が付く。引手は環状部の手前で折れているがほぼ完形であり、銕は一部を残している。素環部長径7.5cm、短径6.5cm、立間幅2.5cm、同高2.0cmを測る。立間の孔は、写真3における鏡板の立間の孔と比較しても縦幅はかなり狭く、横に細長いものとなっている。引手長17.2cm、環状部径3.2cmである。2も鏡板は楕円形を呈し、板状の長方形の立間が付く。引手は完形であり、銕は一部を残すのみである。素環部長径7.0cm、短径5.7cm、立間幅3.5cm、同高2.0cmを測る。引手長17.2cm、環状部径3.4cmである。

② 鉸具 (写真5)

一対の鉄製鉸具である。いずれも輪金の中央がわずかにくぼむ形状であり、棒状の刺金が付く。1は全長7.8cm、最大幅4.6cmを測る。刺金は、5.2cmほど残して先端部が欠損している。2は全長7.5cm、最大幅4.3cmを測る。刺金は全長8.2cm。



写真3 鉄製素環鏡板付轡

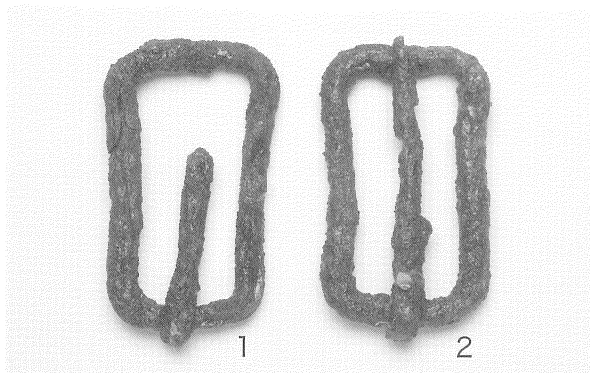


写真5 鉸具

③ 帯先金具 (写真6・7)

どちらも鉄地金銅張爪先形帯先金具とみられる。

写真6の1は爪先の形状がよく残り、長さ3.5cm、幅2.1cmを測る。先端部に1箇所、基部の2箇所に鉄鉾が打たれ、先端部の鉄鉾は長さ1.9cm、鉾頭の径1.1cmである(写真7)。基部の2箇所は、鉾頭と先端を欠いている。先端部の鉾頭付近の鉄地には、わずかに金箔が残り、緑青もみられた。また、基部右側の鉄鉾付近の鉄地にもわずかに緑青が確認できる。写真6の2は上部先端の一部を欠くが、1と同じく爪先形帯先金具とみられる。長さ3.2cm、幅2.3cmを測り、基部には2つの鉾頭が残る。左は鉾頭のみで先端を欠いており鉾頭の径1.0cm、右は鉾頭と先端も残っており鉾頭の径1.0cm、長さ2.2cmである。左の鉄鉾の上部及び右側の鉾頭にもわずかに金箔が確認できた。

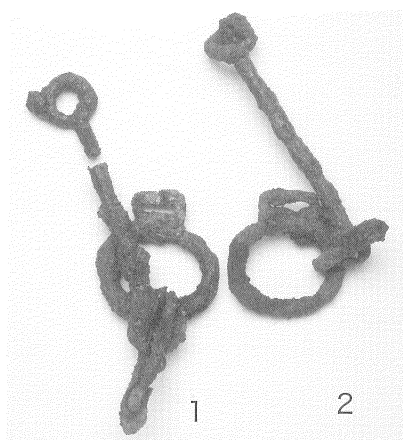


写真4 鉄製素環鏡板付轡

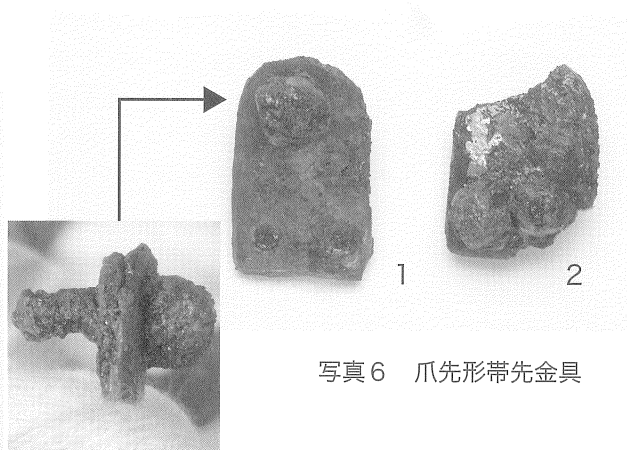


写真6 爪先形帯先金具

写真7 鉄鉾



写真8 耳環

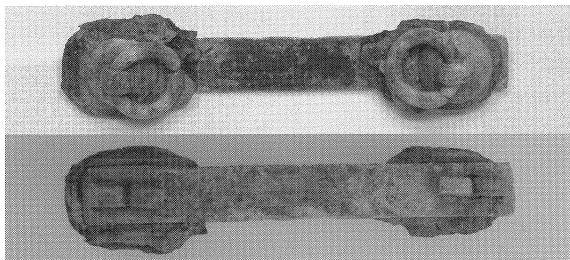


写真10 不明金属器2 (下) 反対面の鉤爪

(3) 装身具

① 耳環 (写真8)

肉眼での観察によるが、銅芯金箔張の耳環とみられる。両面ともに表装材が破損している箇所があり、一部では緑青がみられた。開口部には、わずかだが絞りしわと道具痕と思われるものが確認できる。また、開口部と反対側の鍍金部分には、曲げ加工に伴うしわもみられた。外径2.5cm×2.9cm、内径1.7cm×1.9cm、太さ0.5cmを測る。

(4) その他

① 不明金属器1 (写真9)

写真9は銅製の装飾金具とみられ、楕円形を呈する。中央に0.3cmほどの鍵状の穴が開けられ、その左右に0.2cmほどの鉤状の突起がある。当該金具の下には有機質のものが残り、それを鉤状突起で留めている。また、その鉤状突起の基部は長方形の金具で、その中央にある楕円形の窪みには、平仮名の「お」の「丶」を除いたような文様が施される(写真9右)。材質や有機材を伴う点から、不明金属器2(写真10)とセットとみられるが、そのつくりや加工の精巧さから、どちらも後世のものである可能性がある。楕円形金具は長径2.3cm、短径0.9cm、長方形金具は長辺2.1cm、短辺1.0cm、文様は縦0.7cm、幅0.9cmを測る。

② 不明金属器2 (写真10)

写真10は、吊装具とみられる。長辺5.0cm、短辺1.0cmの細長い銅板の左右両端に環状の吊金具が付いている。銅板と吊金具の間には、不明金属器1にみられた有機質のものが残っており、これ



写真9 不明金属器1 (右) 反対面の長方形金具と文様

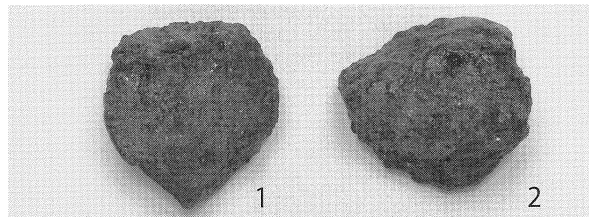


写真11 不明金属器3

を左右両端の吊金具部分から延びる鉤爪で銅板と固定している(写真10下)。

③ 不明金属器3 (写真11)

2点とも鉄製のもので不整形である。1は3.0cm×3.2cmほどで厚さが1.9cm、2は2.8cm×3.2cmほどで厚さが2.0cmを測る。

IV. おわりに

多久川水系の後期古墳(群)は、馬具の出土率が高く、優品もみられる。また、大刀や鉄鏃等の武器が副葬される古墳も多いことから、被葬者は軍事、あるいは馬の管理等にかかわった集団の可能性が指摘されている(註)。坂元古墳群1号墳の被葬者もその一角を担っていたと想定される。

今回の資料紹介は、資料の表面観察に基づき、その概要を報告するにとどまった。今後は、多久川流域で出土する外来系遺物や、同流域でみられる肥後地域の影響を受けた複室構造石室の受容等を含めて検討することで、当該流域の古墳の被葬者の実態や地域の様相が明らかになるのではないかと考える。この資料紹介がその一助となれば幸いである。

【参考文献】

川村 博編1980『坂元古墳群—福岡県糸島郡前原町大字富字坂元所在遺跡調査報告—』前原町文化財報告書第1集 前原町教育委員会

【註】

岡部裕俊「II. 5. 香力古墳群—梶原支群—」江野道和編2002『多久川流域の遺跡群—福岡県前原市多久川流域における埋蔵文化財調査報告—』前原市文化財報告書第79集 前原市教育委員会